

高齢者の地域社会との関わりと孤立感の相互関係分析

名工建設㈱ 清水 聖司
 東亜道路工業㈱ 中井 誉
 大阪工業大学 大学院 原田 健司
 地域活力・街づくり研究所 山村 和也
 大阪工業大学 工学部 岩崎 義一

1章 はじめに

高齢者の社会的孤立が問題とされており、孤独死・餓死・虐待・心中など社会的孤立に伴う事件が大きな社会問題の一つである。内閣府の「高齢社会白書」¹⁾では、世帯構成の変化・雇用労働者化の進行・生活利便性の向上・暮らし向きと社会経済的境遇が社会的孤立の背景とされている。また、社会的孤立の陥りやすい高齢者の特徴として、単身世帯、未婚者・離別者、暮らし向きが苦しい者、健康状態がよくない者などがあげられている。社会的孤立を防止するには地域社会との関わりを促進することが必要であり、高齢者個人のみならず地域としての課題といえよう。

本研究では、高齢者の孤立感と地域社会との関わりとの強弱となって表れるかについて研究する。地域社会に関わるための意志が強い人ほど、孤立感が弱いと考える。高齢者の地域社会との関わりと孤立感の相互関係を明らかにすることを目的に実施する。

研究方法は、大阪市旭区・北区の高齢者を対象に聞き取りによるアンケート調査を実施（2016年10月19日～10月31日に106件）し、世間との付き合いの程度と孤立感に着目して高齢者の地域との関わりと孤立感の相互関係を確かめた。各個人属性ごとに傾向を見つけ出し、高齢者の地域社会との関わりと孤立感にどのように関係してくるかを調べた。

2章 高齢者の世間との付き合い

高齢者は世間との付き合いの程度が「比較的好い」、またはそれ以上の付き合いで過半数を超えている中で男女別では、女性は男性に比べると世間との付き合いが多い傾向が見られる(図-1)。女性のほうが、社会的であると考えられる。男性は「ほとんどない」の割合が約20%と高い点が注目される。先行研究²⁾では、高齢者の交友関係は女性が幅広い一方、男性は家族や職場仲間関係に偏っている傾向があるといわれており、本研究でも同様の傾向が表れている。

年代別では70歳未満と70歳以上に分けて見たところ70歳未満の方が僅かであるが世間との付き合いが多い傾向が表れた(図-2)。

世帯人数別では、人数の規模が増えるにつれて世間との付き合いの程度が「ある」・「大いにある」の割合が減少傾向にあること、および独居世帯では付き合いが多いもの「ほとんどない」の割合が高いという二極化がみられる。

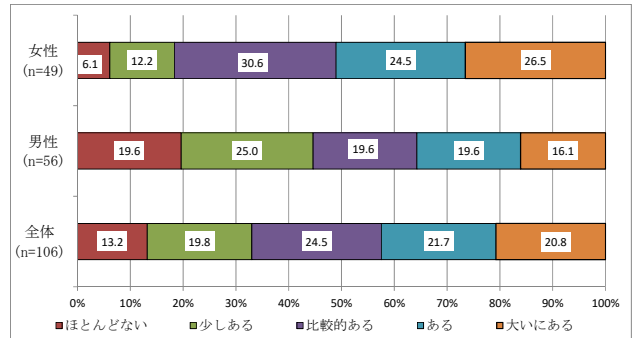


図-1 男女別 世間との付き合いの程度

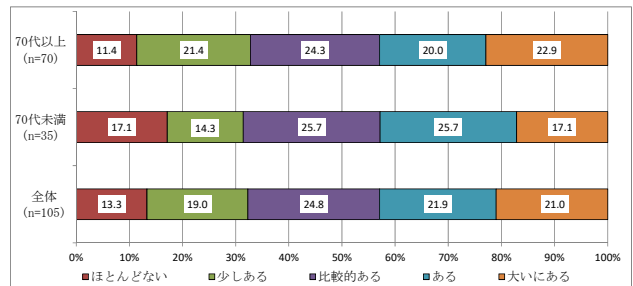


図-2 年代別 世間との付き合いの程度

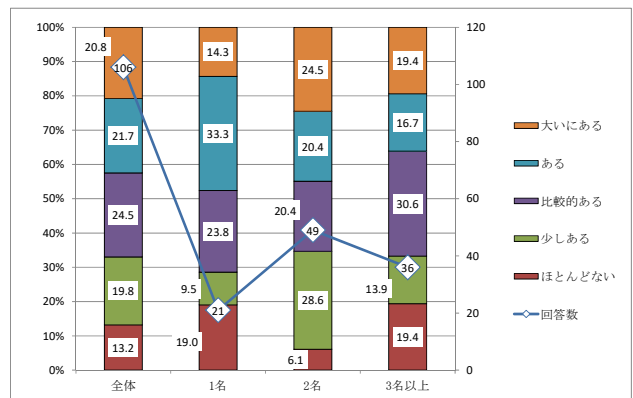


図-3 世帯人数別 世間との付き合いの程度

3名以上でも「ほとんどない」の割合が高いが、これは家庭内のコミュニケーションが存在することが影響を与えていると考えられる。特に独居者は社会的孤立に陥りやすい可能性が高いと考えられる(図-3)。

居住年数別では、「20～39年」が最も世間との付き合いの程度が高く、「19年未満」が最も低いことがわかる。「19年未満」の人は居住年数が短いことからあまり世間との付き合いがなく、「20～39年」の人はある程度住み慣れた上

に、仕事仲間など知り合いが多いためと考えられる。「40年以上」になると住み慣れてはいるがその分年齢も重ね年となり、外出頻度が少なくなることで付き合いが減ったと考えられる。

住宅の種類別では「マンション」「戸建」「アパート」の順に世間との付き合いが多い傾向が見られた。「アパート」に住んでいる人は、世間との付き合いが「ほとんどない」と、答えた人の割合が他と比べて高い傾向がある(図-4)。

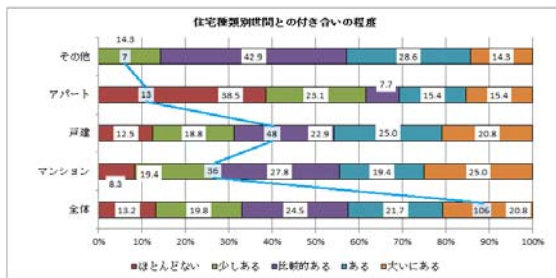


図-4 住宅種類別 世間との付き合いの程度

3章 孤立感の認識

全体でみると約70%の高齢者が孤立感を感じていない中で、男性の方が女性より孤立感を感じている傾向がみられる(図-5)。第2章でみたように男性のほうが世間との付き合いの程度が低いため、孤立感が多い結果に繋がったと考えられる。男性だけに「孤立感には常に残っている」の回答があった点が特筆される。先行研究³⁾では、高齢者の社会的孤立には、男性の比率が高いことが示されており、本研究でも同様の傾向がみられる。

年齢別では、70代未満のほうが70代以上に比べ孤立感が低い傾向がある(図-6)。先行研究⁴⁾では、高齢であるほど孤立しやすいことが示されている(Townsend 1968: Victorら 2000)。

男女別、年齢別ともに各先行研究と同様の傾向が表れており良好な結果が得られたと考えられる。

世帯人数別では、人数が増えるごとに孤立感が減少している。独居世帯では孤立感を感じやすくなると考えられる。これは内閣府の「高齢社会白書」¹⁾の社会的孤立に陥りやすい高齢者の特徴とも合致している。逆に世帯人数が複数になると、会話などをすることで孤立感が緩和されると考えられる(図-7)。

住宅種類別では、孤立感を感じている人は「マンション」「アパート」「戸建」の順に多いことが分かった。

居住年数別では居住年数が長いほど孤立感を感じにくい傾向がある。居住年数を重ねることで周囲に知人が増え、地域に馴染むことから孤立感が緩和されていると考えられる(図-8)。

4章 孤立感と地域社会の関係

世間との付き合いの程度別に孤立感の程度をみた(図-9)。これによると世間との付き合いの程度が多いほど孤立

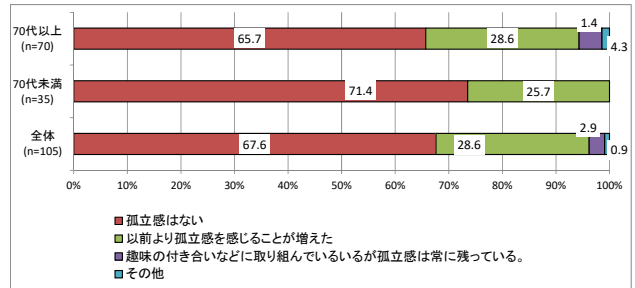


図-6 年齢別 孤立感

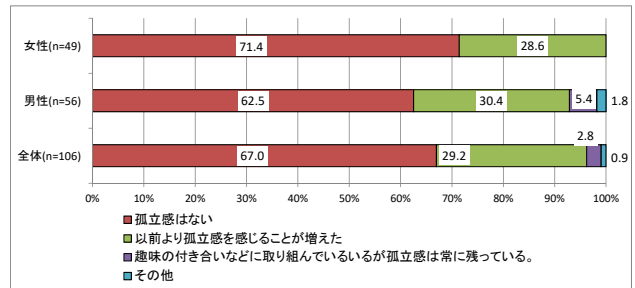


図-5 男女別 孤立感

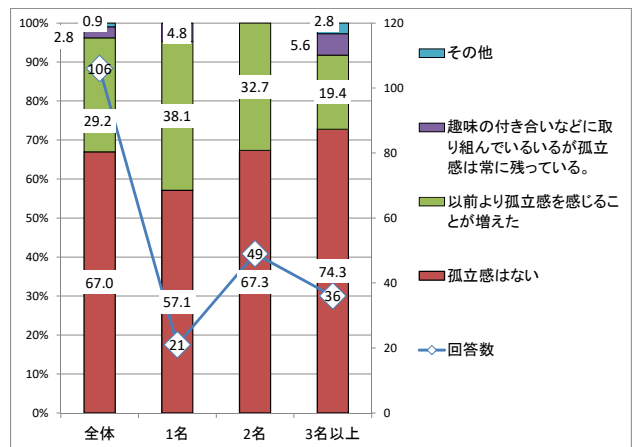


図-7 世帯人数別 孤立感

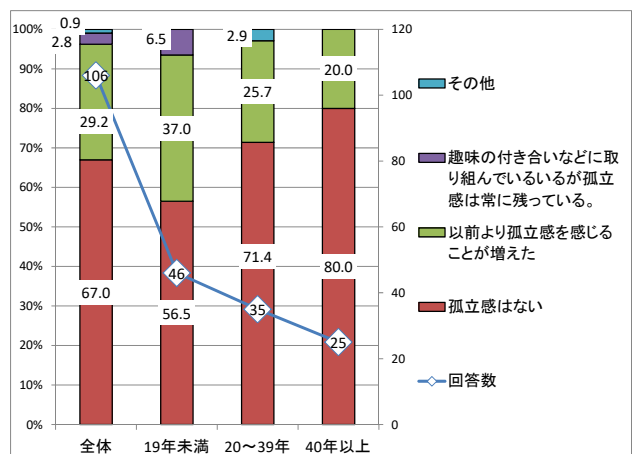


図-8 居住年数別 孤立感

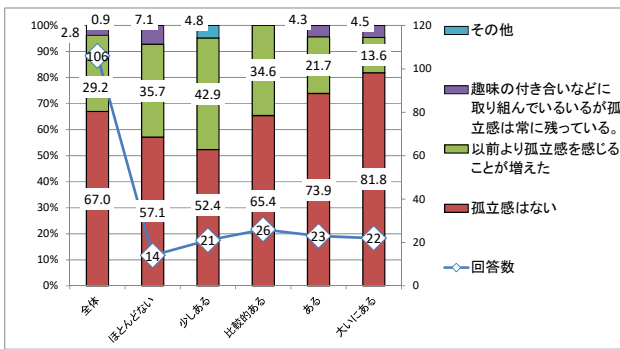


図-9 孤立感と世間との付き合いの程度の関係

感を感じている割合が低い傾向がみられる。つまり世間との付き合いの程度が少ないほど孤立感を感じやすい傾向があることがわかる(図-9)。本研究では上記の傾向があることを確認することが主要な目的の一つであり、重要な結果だと言える。

上記と同様の傾向は男女別・年齢別でも確認された。また、独居者が社会的孤立に陥りやすい傾向があるため、世帯人数別の世間との付き合いの程度と孤立感について傾向をみた(図-10)。これによると独居世帯でも世間(地域社会)とのつながりを持つ傾向が高い高齢者ほど孤立意識が低く、この逆の傾向も表れている。

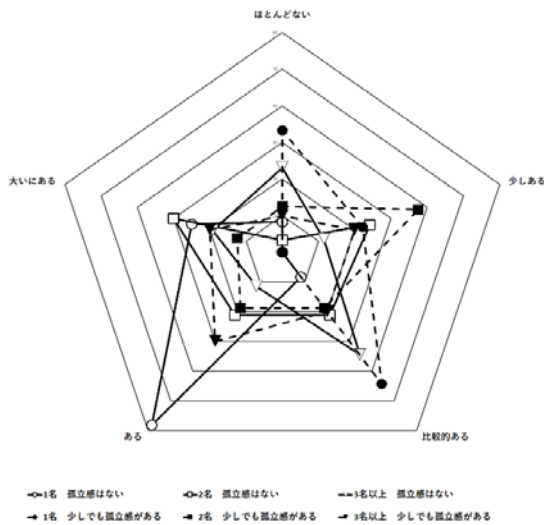


図-10 世帯人数別の孤立感と世間との付き合いの程度の関係

5章 孤立感と付き合いの間における潜在要因分析

今回、潜在要因分析を行うにあたり潜在変数を取り扱う共分散構造分析を試みた。まず、モデルとデータの適合度について、GFI、AGFI、CFIは全て1.0に近いほど適合度が良いと判断できる。結果、GFI=0.957、AGFI=0.914、CFI=0.871と各数値が算出された。また、RMSEAは複雑なモデルに用いることが多い指標とされており、0.05以下は当てはまりが良いとされている。結果、0.04だった。これらの数値から今回のモデルとデータの適合度は十分であると判断できる。

この結果(図-11)において、潜在変数は「絆の大切さ」と「地域社会での存在意識」と考えた。観測変数の数値は1.0に近いほど潜在変数と因果関係をもつことを示している。「絆の大切さ」に最も関係してくるのは0.56の「孤立感について」で、次いで0.36の「世間との付き合いの程度」が因果関係を示した。数値はあまり大きくないが「絆の大切さ」という潜在意識が大きいと孤立感意識が低くなり、世間との付き合いの程度が高くなることはいえる。つまり、4章で述べた傾向がここにも表れている。また、「地域での存在意識」は居住年数が1.0と強く因果関係を示しおりその他の観測変数は数値が小さく関係が弱いことがわかる。「地域社会での存在意識」が大きいと居住年数の長さや大きな関わりがあるといえる。最後に、「絆の大切さ」と「地域社会での存在意識」の相関関係は0.4と中度の相関があることがわかった。

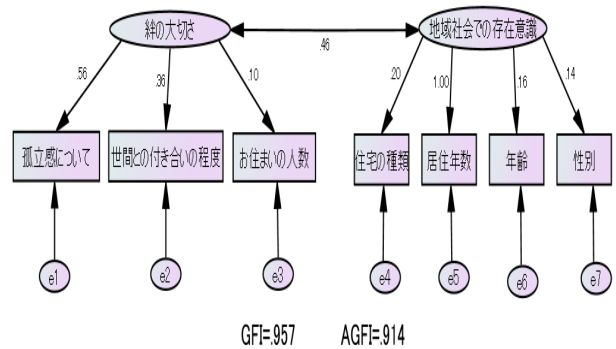


図-11 共分散構造分析結果

次に、孤立感の程度の違いに影響している要因を判別分析的視点から行うため、数量化分析Ⅱ類を試みた。「世間との付き合いの程度・居住年数・住宅の種類」の3項目が孤立感についてどのように関わっているのかを数量化Ⅱ類で分析した(図-12)。

第1軸では孤立感について最も影響を与えているのは居住年数で、第2軸では世間との付き合いの程度である。このことから、第1軸は地域的定着の程度で第2軸は社会的定着の程度と解釈できる。このことは、カテゴリースコアとレンジ値などから判断した。この分析の第2軸までの累積寄与率は82.0%となった。

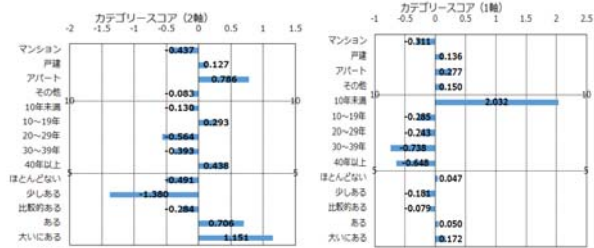
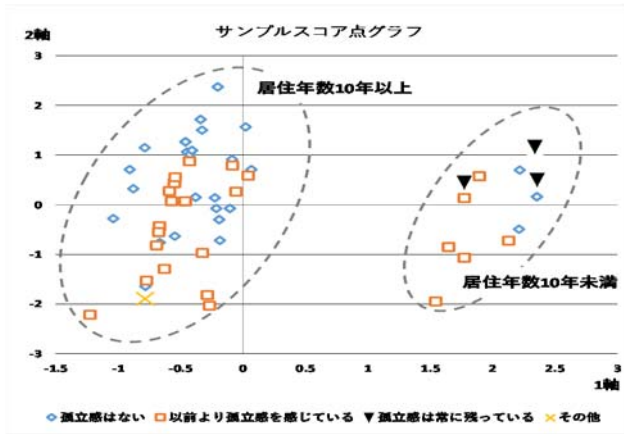
このことから世間との付き合いの程度が高い人ほど孤立感を感じておらず、低い人ほど孤立感を感じている傾向があることがわかる。

6章 まとめ

本研究では高齢者の地域社会との関わりと孤立感の相互関係を明らかにしてきた。

2・3章では、

・男女別では、男性のほうが世間との付き合いの程度が低いため、孤立感が多い結果に繋がったと考えられる。男性だけに「孤立感には常に残っている」の回答があった。



1軸			2軸		
アイテム名	レンジ	偏相関係数	アイテム名	レンジ	偏相関係数
住宅の種類	0.587 2位	0.097 2位	住宅の種類	1.224 2位	0.134 2位
居住年数	2.770 1位	0.402 1位	居住年数	1.002 3位	0.127 3位
世間との付き合いの程度	0.352 3位	0.054 3位	世間との付き合いの程度	2.532 1位	0.297 1位

図-12 数量化分析Ⅱ類によるサンプルスコアプロット図とカテゴリスコアとレンジ値

- ・年齢別では、70代未満のほうが世間との付き合いが多く、僅かであるが孤立感が少ない傾向がみられる。
- ・世帯人数別では、独居者の世間との付き合いが最も多いのに対し、孤立感独居者が最も感じている。しかし、独居者だけでみると孤立感を感じていない人は世間との付き合いの程度が高く、この逆の傾向も表れている。
- ・住宅の種類別では、マンションが世間との付き合いが一番高い傾向にあったが、孤立感をみるとマンションが一番感じている結果がみられた。
- ・居住年数別では、居住年数が長いと孤立感を感じにくいのに対し、居住年数が長くても世間との付き合いがあるわけではない。しかし、数量化分析Ⅱ類の分析では、居住年数が長いほど世間との付き合いの程度が高い傾向がみられた。
- 4章では、
 - ・世間（地域社会）とのつながりを持つ傾向が高い高齢者ほど孤立感意識が低く、この逆の傾向も明瞭に表れている。
- 5章では、
 - ・共分散構造分析と数量化Ⅱ類の分析でも上記までの傾向が分析された。

本研究より、高齢者の孤立感地域社会との関わりの強弱となって表れるか研究してきた結果、孤立感を緩和させるためにはやはり世間（地域社会）とのつながりや絆を大

切にすることが重要だといえよう。今後の課題として高齢者がつながりや絆を深めることができるような場を設けることが急務だと考える。

【参考文献】

- 1) 内閣府 2010, 「平成 22 年版 高齢社会白書」第 3 節 高齢者の社会的孤立と地域社会 ～「孤立」から「つながり」、そして「支え合い」～ pp52 pp55
- 2) 野辺政雄 1999 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」社会学評論 50 (3・99) 375
- 3) 斎藤雅茂 冷水豊 山口麻衣 武居幸子 「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」社会福祉学 第 50 巻第 1 号 2009 pp115